



リ 5
2759



武家
必學

泰子車表

完



泰平年表引用書目

次第不同、本文二、出所煩也、今不改

御年譜 創業記 列祖成蹟 逸史 國史 江亭記 太田家譜 聚樂行幸記 豐臣家譜 元覽日記 慶長年中記
慶長年錄 當代年錄 道春年譜 羅山文集 退私錄稿 丙申記行 日光記行 野 槌 常住院記 大德院記
稱等由緒書 足利學校由緒書 圓光寺由緒書 惺齋行狀 山州名跡志 駿河記 公卿補任 梵齋日記 家書記 泉抄集
睦子又談 琉球史畧 本朝神考 光 記 玉音抄 曾我家譜 鈴木家譜 島津家記 細川家譜 柳原家記
吉田家譜 中井家譜 御本日記 金地院日記 國師日記 元和年錄 續年錄 東武實錄 嚴政錄 光廣御見光記行
紀州年錄 松榮記事 室算事畧 日光山日記 同御緣起 寬永宮圖 御制法 君臣言行錄 太猷公治世畧記 葉室家數
寬永行幸記 三雲感賢家譜 長壽日記 諸家末寺帳 寬永御論日記 孔子堂日記 春齋畧譜 弘文院家記 鶴峯家譜畧
國史館目錄 鳳岡年譜 鳳岡全集 正保日記 正保事錄 以貴小傳 北條系譜 山日記 會津世稿 上津天神言行錄
見林山朝記 視聽目錄 坂下院日記 寬明日記 御當家令命 仰景錄 慶實畧錄 龜岡石見日記 德山家記 桑山家記
三雲家記 永井高庸家記 万天日記 貞祿日記 吉良日記 宝德日記 越前光長家記 憲廟實錄 貞享諸家書
延室戶切繪圖 昔々物語 湯原日記 常史義行實 遺老物語 水野勝長家譜 細井廣瀨家帳 幸若家記 柳澤傳家記
仕官格義 續紹運錄 蕃山實錄 大嶽義近家譜 新令句解 享保錄 同續編 同通鑑 同遺事 同成典 水府家記
加州家記 庶物類纂 官中秘策 官中要錄 文露叢 玉露叢 秋生家譜 木下實家譜 服部保廣家譜
室直清家譜 下田日記 伊勢貞文家記 小笠原持廣家記 憲法部類 白石遺文 折焚家 仲書 兼山麗澤秘策
御書物方日記 蜷川家記 奈佐勝英家譜 仰高錄 春の御船 多紀安元家記 延寶天明日記 日光御社記 小頭日記
安齋寬平化政日記 小笠原德家記 宗義家記 大村家記 松浦家記 選海關鎖國論 山本邦家記 近藤重利記 御觸書 天保日記

泰平年表要目索引

卷一	卷二	卷三	卷四	卷五	卷六	卷七	卷八	卷九	卷十	卷十一	卷十二	卷十三	卷十四	卷十五	卷十六	卷十七	卷十八	卷十九	卷二十
...

西園 弘治 十六年今川義元の居城駿府に
らせぬ途中織田家に奪はれしに尾呂熱田の在任 天文 十八年十
月九日尾別より三河に河津に月又駿別義元の許に到らせぬ人 天文 廿三年
西園 弘治 二年正月十六日駿府に於て元被殺元首被せ加え弟しせ
て次第之弟元信とす 弘治 三年の去る人元康と改是
年今川治親大輔吉女実八園に刑部少輔氏廣の娘 弘治 廿九年
西園 弘治 元年三河小 永禄 元年三河小 人許其寺於ふ出
鈴木日向中成替せしる 弘治 初陣あり 永禄 二年二月六日足利次郎之弟
佐康君生 弘治 廿九年九月 永禄 二年三月十八日足利次郎之弟
二年八月廿七日逝登陸院及葬法興寺に納骨院 同 年 義元討死の後六月廿三日足利次郎
よ西園 永禄 元年織田信長と西河親と今川氏と好むは 永禄 元年二月
源家おのの軍書に十八冊阿部於菅次郎正務身たりして書写せしる 永禄 六

年の秋中家康と改 永禄 七年之別東西の事属七 永禄 八年三月留服君生 弘治 廿九年
七月小宗氏重家文禄二年再跡池田守輝改是年 永禄 九年十二月廿九日從上同下河
二月廿日逝極良心院及葬系和院後建國別考先安寺 永禄 九年十二月廿九日從上同下河
致云是世段國と云 永禄 十一年正月十日左京大夫より改是年氏義と討せしる 遠別
四年子属七 元康 元年正月遠別漢松城より移徙 元康 二年正月廿日從上同下河
侍從 天正 二年正月廿日從上同下河 天正 二年八月秀康君生 天正 二年八月廿九日從上同下河
十月十日封城あり八年二月廿日從上同下河 天正 二年七月廿日從上同下河
十二年望に月八日逝極良心院及葬系和院後建國別考先安寺 天正 二年十二月十日從上同下河
廿九日右近衛権少輔 天正 七年正月廿七日竹千代君誕生 長九君 秀忠公 天正 八年正月
月廿日從上同下河 天正 九年九月忠吉君生 天正 九年九月廿日從上同下河
同 年 十月十日從上同下河 天正 九年十月廿日從上同下河
天正 十年九月十三日信吉君生 天正 十年九月廿日從上同下河
天正 十年九月十三日信吉君生 天正 十年九月廿日從上同下河
十月廿日從上同下河 天正 十年九月廿日從上同下河

從二位 或之十一年

同年四月十六日小牧山陣 [天正] 十三年十月日控中納言同年十月日

正二位同年十二月日發府城より移徙 [天正] 十四年六月十日豊原宮白秀吉の妹

出入樂禮 [天正] 十八年八月十日發樂原に赴去 同年十月日大坂小町にせぬ小島秀吉を

此和祥子依て [天正] 十五年八月八日從二位權大納言同年十二月日合左を清大納言豊原に

此年奉山 [天正] 十六年八月十日合左を清大納言と出辭 二月發府の山城修理同年十二月日合左を豊原に

行事の時寄松祝ひより松の葉を毎ふいせられし等の程をさしうてその

夏日侍の奉發樂原に寄松 同年十二月日合左の山城修築の限りありし礼日君の光り成りあり大如

のろ紙 是も奉發樂原 [天正] 十七年正月日合左の山城修築の限りありし礼日君の光り成りあり大如

秀忠公の母堂西郷局逝去 [天正] 十八年正月日合左の山城修築の限りありし礼日君の光り成りあり大如

年二月十日日合左の山城修築の限りありし礼日君の光り成りあり大如

那し信長お換武義上世と從下從六々玉兵を以てその内九方を在る互流の資利不於其地為り日市

場白頭登米時中泉法見ち木の地一子石傳田一子石を控稱の地とせらる

山城

八月日武義玉江戸城より移徙 [天正] 十四年六月十日豊原宮白秀吉の妹

山城を築く千村と武田田田田といひは徳元年に月八日戸城修築の限りありし礼日君の光り成りあり大如

二つあり門外小本と以て飛鳥と名を城門を入るは不詳去左在る連して中城小本と云ふは戸城と稱す

新との人の文政八年に於りて系州村菴おはる横川の社修繕村小本と云ふは戸城と稱す

若菴と稱す村菴を以て治長と名を板打て南の堀田小堀九月法余の徳淵に再記を作て其玉中宮

ありのち菴を命り赤八眼小菴海を以てと名を治長と名を板打て南の堀田小堀九月法余の徳淵に再記を作て其玉中宮

人々集めて弓矢を以て治長と名を板打て南の堀田小堀九月法余の徳淵に再記を作て其玉中宮

年八月と名を治長と名を板打て南の堀田小堀九月法余の徳淵に再記を作て其玉中宮

かやのこしと名を治長と名を板打て南の堀田小堀九月法余の徳淵に再記を作て其玉中宮

害せしれは上杉の持城と名を治長と名を板打て南の堀田小堀九月法余の徳淵に再記を作て其玉中宮

ち資さし小本左系大正氏徳小本大正氏年四月日合左の山城修築の限りありし礼日君の光り成りあり大如

天正十一年までを山氏に戸城を保せり 是年山城本の統士と入地小町と云ふ事忠親在井伊

由政亦多忠親村系康政石川康道是と支配し一系及依兄小交代は

年正月日合左の山城修築の限りありし礼日君の光り成りあり大如

山田氏辰次上杉城後むむ又十年日合左の山城修築の限りありし礼日君の光り成りあり大如

吉田城元和二年七月十日日合左の山城修築の限りありし礼日君の光り成りあり大如

東

三

石小出疎是太閤朝解征伐依て之此年小出岳と関て大政六郎の宅地とせらるる云と云町と云

文祿二年處士兼系庸小令七郎 所前貞親政要と讀せらるる是 所前清波の史云と云一

始り 文祿三年始めて子任小橋を築らるる号と千位の大橋と云同年二月廿九日豊后太閤

若時花又の時又首の和方と云録あり その秋ハ 侍ぬる花のまきとわらうて安や吉野のまきの花

瀬の上の花 花のまきとわらうて安や吉野のまきの花 瀬の上の花 花のまきとわらうて安や吉野のまきの花

道まきの豊後藩小文祿三年三月秀吉登大坂為元吉北花也 秀吉信守今自所和方五首

大権現利源政家と稱准之居乃此法中全信法眼給巴亦又有縁云々と云云之号今時存一冊五

是二月廿九日のまきとわらうて安や吉野のまきの花 又細川進政良妙集に 神君小代と云る一書

二首と載き 是の秋ハ 侍ぬる花のまきとわらうて安や吉野のまきの花 瀬の上の花 花のまきとわらうて安や吉野のまきの花

言律一首是利学校之要執筆小扇画にお徳大使院持宥推法平川惟の末(要中)然也

之致氣由北佐と和韻をなす 峯分百位 峯念徳令時安 峯中幸子取香亦流 峯月徳助

十一月禮記正義を清系秀賢小代信子 月日松千代君生 山田氏徳長松本秀長

文祿三年仙千代君生 山田氏徳長松本秀長

小元信は書試取て豊后関白小代信子と再学校へ還り納らる 是去り日光記行の事

秀次自京州お密々元信九什也 秀次大津云而意之脱り秀次内書去久入

石法多八腕小江系清あり 八月十八日弟関白大政大臣従一位豊后秀吉云信誠は之

豊吉十三歳末所跡院奉以奉 十一月朝鮮の法初朝信見小元信 神君小代

月余津中征伐信あり 七月下野小出陣 同年九月秀吉京小陣 運信信法

西九 入清公卿後神官悲來實十一月十八日美枝中君生

東

尾州 宗祖

東

29

山上浩

二月十九日

二月十九日東瀛と同謀せらる

業記の破刺

同日七月七日征夷大将軍の御拜日十六日

台廟將軍

宣下り是より

大所討極と稱す是より

是年二月

城小なる傷者林又之并信務と出さる

是春の御推挙年

大おまの御内之臣とすくける二条の山本にて洋揚し奉りし是れ先長を信務とす

後成せしより先氏より御より我代をさすけりしは作ける各先を承りしは御より

御より先氏より御より先世の孫ありと後漢の御より先氏より御より先世の孫あり

東坡詩に記すは先世の孫ありと後漢の御より先氏より御より先世の孫あり

御より先氏より御より先世の孫ありと後漢の御より先氏より御より先世の孫あり

御より先氏より御より先世の孫ありと後漢の御より先氏より御より先世の孫あり

御より先氏より御より先世の孫ありと後漢の御より先氏より御より先世の孫あり

御より先氏より御より先世の孫ありと後漢の御より先氏より御より先世の孫あり

御より先氏より御より先世の孫ありと後漢の御より先氏より御より先世の孫あり

御より先氏より御より先世の孫ありと後漢の御より先氏より御より先世の孫あり

御より先氏より御より先世の孫ありと後漢の御より先氏より御より先世の孫あり

御より先氏より御より先世の孫ありと後漢の御より先氏より御より先世の孫あり

御より先氏より御より先世の孫ありと後漢の御より先氏より御より先世の孫あり

御より先氏より御より先世の孫ありと後漢の御より先氏より御より先世の孫あり

御より先氏より御より先世の孫ありと後漢の御より先氏より御より先世の孫あり

御より先氏より御より先世の孫ありと後漢の御より先氏より御より先世の孫あり

御より先氏より御より先世の孫ありと後漢の御より先氏より御より先世の孫あり

御より先氏より御より先世の孫ありと後漢の御より先氏より御より先世の孫あり

御より先氏より御より先世の孫ありと後漢の御より先氏より御より先世の孫あり

御より先氏より御より先世の孫ありと後漢の御より先氏より御より先世の孫あり

御より先氏より御より先世の孫ありと後漢の御より先氏より御より先世の孫あり

御より先氏より御より先世の孫ありと後漢の御より先氏より御より先世の孫あり

御より先氏より御より先世の孫ありと後漢の御より先氏より御より先世の孫あり

御より先氏より御より先世の孫ありと後漢の御より先氏より御より先世の孫あり

江段

二月十日遊遊一照院及 二月十日遊遊一照院及

二月十日遊遊一照院及 二月十日遊遊一照院及

二月十日遊遊一照院及 二月十日遊遊一照院及

二月十日遊遊一照院及 二月十日遊遊一照院及

二月十日遊遊一照院及 二月十日遊遊一照院及

二月十日遊遊一照院及 二月十日遊遊一照院及

二月十日遊遊一照院及 二月十日遊遊一照院及

二月十日遊遊一照院及 二月十日遊遊一照院及

二月十日遊遊一照院及 二月十日遊遊一照院及

二月十日遊遊一照院及 二月十日遊遊一照院及

二月十日遊遊一照院及 二月十日遊遊一照院及

二月十日遊遊一照院及 二月十日遊遊一照院及

二月十日遊遊一照院及 二月十日遊遊一照院及

二月十日遊遊一照院及 二月十日遊遊一照院及

二月十日遊遊一照院及 二月十日遊遊一照院及

二月十日遊遊一照院及 二月十日遊遊一照院及

二月十日遊遊一照院及 二月十日遊遊一照院及

東

七

代の同題をみ成云上保曆間記の物より別書 中流多之の首は十九日夜ふ及之流余
莊嚴院保曆間記抄本 清承小於之是と讀む是年 神孫 大敵公甫八景松の法小抄本
を揮筆せらるる長 十七年二月 清承小於之東鑑登意記是日と考しあふは日連ありあり
月二十日伊豆山般慈院院日本紀と題をなますて是と讀むあつる十日夜と道と讀みあり
中下控 湯武放伐の湯あり は對國往山文集に載又退私孫抄本 神孫の法ありて天下至大者
至法者此といふ字を學校より移し信のさふ如きと條より時書一元卷ふ
兄弟のりしは神孫と云天下の名ありと傳はる 月二月抄軍家後廢承 入所あり 大新抄本(白浪
三万長長後二十卷をせらるる月六月廿六日道春(曾子子貢一貫の多成下同せらるる亦湯武の海あり
月七月十八日宗室遺物として若氏日抄三十一卷を題し晦日遷居南宮形次郎子維新抄較法本
と題を依て流し雲妻の抄本と同ありあり八月言科法法華と傳記ふは是ふ十八日大明人一
官出業授ふとを正法亦大明人祖友 中流小於の依てあふとて唐古の史雜法あり月十月
小 渡津武別急きふ揃一あり十二月十六日後廢承の海城是年道書小令して東鑑總要を
撰上せしめらるる 神山文集集又及云年漢小 大林若業に
為漢東鑑以て學校素後及長抄出く 長 十八年二月後廢承田中に撰一あり

日月言 所承小於之長湯治と傳之六月梵舜出仕神及傳秘秘密の事賑く受へき小罪
さる中位出さる 及妻の抄本神孫考ふ余侍後府時 幕下一日与致意云法神對法及老若の法
規傳再さる又冊抄本在田神孫院後廢承の事なり 清承小於日本紀神孫の如きとて傳はる
漢さのけはる及妻をてよりてさふ如きとて 大お承承の事なりとて傳はるさる
小神代の如き神孫考ふ余侍後府時 幕下一日与致意云法神對法及老若の法
丈山忠小昔 東照大神天の治世也法余有首筋方長技聖聖友なることと妻抄本余對曰是太公可教
武王之法也君可之依は一後後府内修神孫考ふ余侍後府時 幕下一日与致意云法神對法及老若の法
所可多則さるる三書年月の抄本とて傳はるさるの如きとて傳はるさる 月年六月十六日公承承の
法及之定めらるる手書一巻に公承承の如きとて傳はるさるの如きとて傳はるさる 月七月七日日本の記
録中子ありきの中流法也同九月六日神孫抄本一切經の事抄本目録 中流の事 神孫の如きとて傳はる
廣院東の一切經の目録抄本神孫考ふ余侍後府時 幕下一日与致意云法神對法及老若の法
七十一卷を讀み及妻抄本あり九月六日神孫抄本二卷を同也と云く洋宗慶云篇成傳考小至一切經
之抄本使徒小才一抄本在干神孫抄本あり卷九の事と七十卷抄本若干卷を十八年某月令有
司妻若草刀上回上神孫抄本あり卷九の事と七十卷抄本若干卷を十八年某月令有
佛寺免担抄本大經本今安室傳若也身二抄本在巨只修禪寺長十卷某月遺傳抄本あり納塔上
ち才之抄本在在和別田抄本あり長十四年六月十日神孫抄本二卷院門之傳抄本あり納塔上
唐本才之抄本 月年九月十七日後廢承登堂月廿七日入所 長 十九年三月西九小抄
年三月後廢承へ還承月三月又小抄本同他云 所承小於之即承にて長抄本首作出さる

月七日山崎の傍に下向の... 上段小集するの処... 九月日山崎の傍に下向の... 月九日山崎の傍に下向の... 月十日山崎の傍に下向の... 月十一日山崎の傍に下向の... 月十二日山崎の傍に下向の... 月十三日山崎の傍に下向の... 月十四日山崎の傍に下向の... 月十五日山崎の傍に下向の... 月十六日山崎の傍に下向の... 月十七日山崎の傍に下向の... 月十八日山崎の傍に下向の... 月十九日山崎の傍に下向の... 月二十日山崎の傍に下向の... 月二十一日山崎の傍に下向の... 月二十二日山崎の傍に下向の... 月二十三日山崎の傍に下向の... 月二十四日山崎の傍に下向の... 月二十五日山崎の傍に下向の... 月二十六日山崎の傍に下向の... 月二十七日山崎の傍に下向の... 月二十八日山崎の傍に下向の... 月二十九日山崎の傍に下向の... 月三十日山崎の傍に下向の...

月十日輝虫活要流日本紀延喜式木の抜出... 月十一日輝虫活要流日本紀延喜式木の抜出... 月十二日輝虫活要流日本紀延喜式木の抜出... 月十三日輝虫活要流日本紀延喜式木の抜出... 月十四日輝虫活要流日本紀延喜式木の抜出... 月十五日輝虫活要流日本紀延喜式木の抜出... 月十六日輝虫活要流日本紀延喜式木の抜出... 月十七日輝虫活要流日本紀延喜式木の抜出... 月十八日輝虫活要流日本紀延喜式木の抜出... 月十九日輝虫活要流日本紀延喜式木の抜出... 月二十日輝虫活要流日本紀延喜式木の抜出... 月二十一日輝虫活要流日本紀延喜式木の抜出... 月二十二日輝虫活要流日本紀延喜式木の抜出... 月二十三日輝虫活要流日本紀延喜式木の抜出... 月二十四日輝虫活要流日本紀延喜式木の抜出... 月二十五日輝虫活要流日本紀延喜式木の抜出... 月二十六日輝虫活要流日本紀延喜式木の抜出... 月二十七日輝虫活要流日本紀延喜式木の抜出... 月二十八日輝虫活要流日本紀延喜式木の抜出... 月二十九日輝虫活要流日本紀延喜式木の抜出... 月三十日輝虫活要流日本紀延喜式木の抜出...

傳一のふ二月日長丸君生 母未詳 長丸君生 九月廿六日逝 二月廿日大坂の御入に後同女御権之綱云

從二位日廿九日 皇承内日年二月十日御入 以登途江戸へ 還行六月十日御那畏生 母未詳 長丸君生 九月廿六日逝

祓官宇野の末子 皇承中後稱言 國史 皇文 皇文 七年正月 東照宮より実承に於て二十万石を世

十二年二月廿日逝 皇承院 皇承院 皇承院 皇承院 皇承院 皇承院 皇承院 皇承院

通院 十月七日 皇承院 皇承院 皇承院 皇承院 皇承院 皇承院 皇承院 皇承院

の遺物 東照宮を執之 六月十日 皇承院 皇承院 皇承院 皇承院 皇承院 皇承院 皇承院 皇承院

松平定房 皇承院 皇承院 皇承院 皇承院 皇承院 皇承院 皇承院 皇承院

生 皇承院 皇承院 皇承院 皇承院 皇承院 皇承院 皇承院 皇承院

東照宮の御殿 六月十六日 二条城小於て將軍 宣下内 大坂征夷大將軍 三位を爲す

元の内 皇承院 皇承院 皇承院 皇承院 皇承院 皇承院 皇承院 皇承院

皇承院 皇承院 皇承院 皇承院 皇承院 皇承院 皇承院 皇承院

皇承院 皇承院 皇承院 皇承院 皇承院 皇承院 皇承院 皇承院

初解

皇承院 皇承院 皇承院 皇承院 皇承院 皇承院 皇承院 皇承院

皇承院 皇承院 皇承院 皇承院 皇承院 皇承院 皇承院 皇承院

皇承院 皇承院 皇承院 皇承院 皇承院 皇承院 皇承院 皇承院

皇承院 皇承院 皇承院 皇承院 皇承院 皇承院 皇承院 皇承院

皇承院 皇承院 皇承院 皇承院 皇承院 皇承院 皇承院 皇承院

胡祥碑使書 堀山礼堂年目里材小石動堂八丁堀新地小里叢寺之元年法士の武意
 改寛永二年三月十八日川城(山)改爲吉野院の標 台境同廿日 遷寺同七月見光
 社系十月晦日本礼壇四坊以没炮中七核以四付改 寛永三年正月約和丸は 法清
 四望之園小於て 大寺町(四)對新築初正於一人三月在善へ命一寺和字抄と選せむ
 巳月日光山より里中清の月内友在り女政長が搦田の屋敷沈上亭へ 法清の月内友在り
 孫子法解を撰せむ六月三畧法解と撰せむ及書入經の要略と撰一と是を
 執り同八月上洛同月十日 山系内月十八日從一位左大臣九月六日之上 履歷二条城へ
 仍奉七日兼樂善法八日和の四書は日 古徳公 大斷只和方と撰せらる 寛永四年記
 九日也法真仍十日 遷寺同月十月九日江戸 遷寺同月十月二条城在り 大の四書は日
 同十年大畧十二卷と成り同十二年改改二人を撰り 寛永四年三月三日法清山改爲九月廿日
 上飛 法清法堂造管於月十七日正遷宮是と東叡山寛永水と山頓院と号し 寛永又
 年四月日光山 社系十月六月尚書夜丸山花畑水井信隆も進修村練丸寺也切殺

法清の社系も遺三條在の俗本名をとり及は備二人も祇乃有る如友人在述去條九弟進の法清也
 周夜に於て痛の者久々の子法手祇平也祇乃夜之弟右の多祇生也の秘録中其の法清也
 出雲我精左の金橋守之弟友人少く練九弟捕押り夜夜ありと手祇負のゆえ友人勸めて法清也
 法清の社系も遺三條在の俗本名をとり及は備二人も祇乃有る如友人在述去條九弟進の法清也
 永井信隆も遺三條在の俗本名をとり及は備二人も祇乃有る如友人在述去條九弟進の法清也
 社系同月十月九日江戸 遷寺同月十月二条城在り 大の四書は日
 同十年大畧十二卷と成り同十二年改改二人を撰り 寛永四年三月三日法清山改爲九月廿日
 上飛 法清法堂造管於月十七日正遷宮是と東叡山寛永水と山頓院と号し 寛永又
 年四月日光山 社系十月六月尚書夜丸山花畑水井信隆も進修村練丸寺也切殺

代事奉大徳及美命とて之を撰上凡二月廿六日日本必那の島に徳徳法皇と撰せしめらる

是正保吉と撰皇と云今山文庫小沢存と云 大同十一年上元後少子孫徳徳法皇と撰せしめらる

宣光院及仁孝八月廿日逝 宣光院及仁孝八月廿日逝

撰せしめらる二月廿三日 美原元後及美小命とて 美原元後及美小命とて

又月日光山神皇小御孫と云 美原元後及美小命とて

又月日光山神皇小御孫と云 美原元後及美小命とて

又月日光山神皇小御孫と云 美原元後及美小命とて

又月日光山神皇小御孫と云 美原元後及美小命とて

又月日光山神皇小御孫と云 美原元後及美小命とて

日先
御
後

あり是年小笠原右大臣監忠美作子用て家傳元後日記と記して是也 小笠原 同一年今

年々 禁裡に於て毎年修禊日光寺幣使と云らる 修禊も始ると云修禊九月十六日

徳松若生 徳松若生 二月十七日 持元極元年修禊尾張相領也 是と撰とせらる

了中(江 作舟 了中(江 作舟 持元極元年修禊尾張相領也 是と撰とせらる

垂穂退か 垂穂退か 一曰上列記事也 垂穂退か 持元極元年修禊尾張相領也 是と撰とせらる

是正保吉 是正保吉 二月廿三日 美原元後及美小命とて 是正保吉

又月日光山神皇小御孫と云 又月日光山神皇小御孫と云 美原元後及美小命とて 又月日光山神皇小御孫と云

又月日光山神皇小御孫と云 又月日光山神皇小御孫と云 美原元後及美小命とて 又月日光山神皇小御孫と云

献

二十九

正保二年四月十八日夜月小暈あり 重暈の赤和南小月影の如く
全く亦不融字ラモ略記粗存秋家と名
御月記に本月八日清て記すの月影ハ月廿八日小風烈吹雪降 極寒の如し 月廿九日麻布也田致有
星りて御多り月の如きガメ

御多り星りて御多り月の如きガメ
御多り星りて御多り月の如きガメ

御多り星りて御多り月の如きガメ
御多り星りて御多り月の如きガメ

御多り星りて御多り月の如きガメ
御多り星りて御多り月の如きガメ

御多り星りて御多り月の如きガメ
御多り星りて御多り月の如きガメ

御多り星りて御多り月の如きガメ
御多り星りて御多り月の如きガメ

光緒

光緒二年三月廿二日夜東大地震日六月廿六日始て火清後二人 後付
被擄走月六月十日川城小大電降をきッ二行或ハ十月十日火地震大急な
民屋彼倒人多死月九月院球人未幾史より日光山小洋礼を月十二日酒井忠務が半迄
下巻表ハ 酒井月十月二日十六日東大地方三年以上の積動を責せしむる 史を揚る
上巻表 史を揚る

光緒二年三月廿二日夜東大地震日六月廿六日始て火清後二人 後付
被擄走月六月十日川城小大電降をきッ二行或ハ十月十日火地震大急な
民屋彼倒人多死月九月院球人未幾史より日光山小洋礼を月十二日酒井忠務が半迄
下巻表ハ 酒井月十月二日十六日東大地方三年以上の積動を責せしむる 史を揚る
上巻表 史を揚る

光緒二年三月廿二日夜東大地震日六月廿六日始て火清後二人 後付
被擄走月六月十日川城小大電降をきッ二行或ハ十月十日火地震大急な
民屋彼倒人多死月九月院球人未幾史より日光山小洋礼を月十二日酒井忠務が半迄
下巻表ハ 酒井月十月二日十六日東大地方三年以上の積動を責せしむる 史を揚る
上巻表 史を揚る

光緒二年三月廿二日夜東大地震日六月廿六日始て火清後二人 後付
被擄走月六月十日川城小大電降をきッ二行或ハ十月十日火地震大急な
民屋彼倒人多死月九月院球人未幾史より日光山小洋礼を月十二日酒井忠務が半迄
下巻表ハ 酒井月十月二日十六日東大地方三年以上の積動を責せしむる 史を揚る
上巻表 史を揚る

光緒二年三月廿二日夜東大地震日六月廿六日始て火清後二人 後付
被擄走月六月十日川城小大電降をきッ二行或ハ十月十日火地震大急な
民屋彼倒人多死月九月院球人未幾史より日光山小洋礼を月十二日酒井忠務が半迄
下巻表ハ 酒井月十月二日十六日東大地方三年以上の積動を責せしむる 史を揚る
上巻表 史を揚る

嚴ウ

三十

出葬送 以是小事小元初の末に... 宝曆十三年四月十六日 徳一 位

嚴有院殿御世

家綱公出車ハ 大猷院殿出坊男出坊堂ハ本之太弟利長女

寛永十八年八月二日卯上列出舟九子 出幼名 竹下代美月九日二日初之

元安 元年六月廿四日申初初夜月九日大和河井港は... 寛永二年正月

西馬共合本て載せ 公より同復時録事場 二年正月各酒井志清分見小 滋河月十日 出登初月先心

社で遷産 社名の多の長流之年右由左... 元安 元年二月廿六日 永田町松平之後改屋敷出用有上元月更廻町山主権現の

元安 元年二月廿六日 永田町松平之後改屋敷出用有上元月更廻町山主権現の... 宣下征夷大將軍兼右大臣大納言

車降身無仗傷さけ月阿部忠清等也秋林在書世して大皇和字抄貞親改要法解を伴ふ也

幼若小執事 改要漢解 日土月始て西九に裏出の由と改と密

不備是年小条正房法皇の爲彦乃ひ徳宗と作又中利安年と為紫院との縁法大御女

の用法と考索一書籍或ハ本只と催して執上凡 謙意元年 改元 正月十日山奥宮遷座

の四組式あり 按今今事より始り小わくは是を二月廿日ありが為年より十日と改と云えり正月廿日

の四組式あり 後園日連方と今治あり正史不見ある元和六年以後連座と改云 亦要云云の事

よめされ 萬葉の西園宮遷座内より其の事と云えり元和六年以後連座と改云 亦要云云の事

獻座の由あり未考の連座の今も是より十日と改と云えり正月十日山奥宮遷座

憲宗の天和 日年八月廿八日夜江大風致月十二日御軍家出掛堂遊去遷座宮樹院殿葬奉

元年あり 山是年余澤紀後宮の痛書編一冊と編集して執上之 謙意元年 改元 正月十日山奥宮遷座

謙意二年正月十六日山奥宮遷座 二月十六日山奥宮遷座 謙意元年 改元 正月十日山奥宮遷座

月廿二日 禁裡宮上 謙意元年 改元 正月十日山奥宮遷座 二月十六日山奥宮遷座

十七日山奥宮遷座 秘要と紀伊敏達院の本と校合する事と云えり山奥宮遷座の事と云えり

山中 秘要と紀伊敏達院の本と校合する事と云えり山奥宮遷座の事と云えり

此世古物と依後宮内書物と云えり山奥宮遷座の事と云えり

此世人の内一人の山奥宮遷座の事と云えり山奥宮遷座の事と云えり

本多と依りて大坂の事と云えり山奥宮遷座の事と云えり

山奥宮遷座の事と云えり山奥宮遷座の事と云えり

山奥宮遷座の事と云えり山奥宮遷座の事と云えり

山奥宮遷座の事と云えり山奥宮遷座の事と云えり

山奥宮遷座の事と云えり山奥宮遷座の事と云えり

山奥宮遷座の事と云えり山奥宮遷座の事と云えり

山奥宮遷座の事と云えり山奥宮遷座の事と云えり

山奥宮遷座の事と云えり山奥宮遷座の事と云えり

山奥宮遷座の事と云えり山奥宮遷座の事と云えり

山奥宮遷座の事と云えり山奥宮遷座の事と云えり

山奥宮遷座の事と云えり山奥宮遷座の事と云えり

山奥宮遷座の事と云えり山奥宮遷座の事と云えり

山奥宮遷座の事と云えり山奥宮遷座の事と云えり

山奥宮遷座の事と云えり山奥宮遷座の事と云えり

樂人春日光下向江流... 作書門八月廿九日... 武藏守掛義... 水除被換... 十月朔日... 同世百林... 有老中傳... 月首五... 萬年六月...

新及

後法隆寺... 會して... 字... 不... 六年... 取人の... 廿一... 二... 三... 四... 五... 六... 七... 八... 九... 十... 十一... 十二... 十三... 十四... 十五... 十六... 十七... 十八... 十九... 二十... 二十一... 二十二... 二十三... 二十四... 二十五... 二十六... 二十七... 二十八... 二十九... 三十... 三十一... 三十二... 三十三... 三十四... 三十五...

有春母命せり 國史録日録廿百午の事徳老列坐久和牧傳 冬余田園史録不設徹之以不為事
終善譜更廿百午改國史録廿百午月傳可也余向可教育事徳老列坐久和牧傳 冬余田園史録不設徹之
九十月月傳可也余向可教育事徳老列坐久和牧傳 冬余田園史録不設徹之

松平陸奥吉徳村家長官事 依酒井雅生改之漢宅と事舎老中列坐吟味 冬余田園史録不設徹之
何事安藝と切敷と果田外礼陪座と事舎老中列坐吟味 冬余田園史録不設徹之
何事安藝と切敷と果田外礼陪座と事舎老中列坐吟味 冬余田園史録不設徹之

大風致 横濱川大七条満ちぬ大水 十月十日掎列伊丹山法下花居洛傳の春草花再前代事
寛文十二年八月十七日紀伊教諭 創業紀考異十冊と叙志 紀伊中御所
創業紀考異十冊と叙志 紀伊中御所 創業紀考異十冊と叙志 紀伊中御所

延宝元年 八月八日 櫻程院
延宝元年 八月八日 櫻程院 延宝元年 八月八日 櫻程院
延宝元年 八月八日 櫻程院 延宝元年 八月八日 櫻程院

延宝元年 八月八日 櫻程院
延宝元年 八月八日 櫻程院 延宝元年 八月八日 櫻程院
延宝元年 八月八日 櫻程院 延宝元年 八月八日 櫻程院

延宝元年 八月八日 櫻程院
延宝元年 八月八日 櫻程院 延宝元年 八月八日 櫻程院
延宝元年 八月八日 櫻程院 延宝元年 八月八日 櫻程院

延宝元年 八月八日 櫻程院
延宝元年 八月八日 櫻程院 延宝元年 八月八日 櫻程院
延宝元年 八月八日 櫻程院 延宝元年 八月八日 櫻程院

延宝元年 八月八日 櫻程院
延宝元年 八月八日 櫻程院 延宝元年 八月八日 櫻程院
延宝元年 八月八日 櫻程院 延宝元年 八月八日 櫻程院

延宝元年 八月八日 櫻程院
延宝元年 八月八日 櫻程院 延宝元年 八月八日 櫻程院
延宝元年 八月八日 櫻程院 延宝元年 八月八日 櫻程院

延宝元年 八月八日 櫻程院
延宝元年 八月八日 櫻程院 延宝元年 八月八日 櫻程院
延宝元年 八月八日 櫻程院 延宝元年 八月八日 櫻程院

延宝元年 八月八日 櫻程院
延宝元年 八月八日 櫻程院 延宝元年 八月八日 櫻程院
延宝元年 八月八日 櫻程院 延宝元年 八月八日 櫻程院

投擲し難借出 彼方を以て殺料に於て除くは殺擲方九十人扶持し六十俵の積りたるを以て同日
 地方を以て殺擲方九十人扶持し六十俵の積りたるを以て同日
 一俵と令七取一 一俵と令三取一 一俵と令三取一 一俵と令三取一
 同日より又月之法を夜病流し同日廿日今度中擲門を以て焼失の如く並流し
 打流し他を以て大失中擲門を以て焼失の如く並流し
 大風を洪水人多死同日廿日今度中擲門を以て焼失の如く並流し
 傷一 医家破舟多人死同日廿日今度中擲門を以て焼失の如く並流し
 大風を洪水人多死同日廿日今度中擲門を以て焼失の如く並流し
 上 救五 安永二年八月十一日日光准后宮定基公法信二法儀一俵小擲門判り定出
 本流 安永二年八月十一日日光准后宮定基公法信二法儀一俵小擲門判り定出
 法儀一俵小擲門判り定出
 為近港船を免渡流去砂碚逆伏は洪水月七月八日より十二日由大風激止列及流列洪水十五日
 近港船を免渡流去砂碚逆伏は洪水月七月八日より十二日由大風激止列及流列洪水十五日

林内他物も亦以て是の如く月次備置奉申取置申す 安永三年二月廿日有言以て大雷二十七より為り
 中用為る所も亦以て是の如く月次備置奉申取置申す 安永三年二月廿日有言以て大雷二十七より為り
 門廿二日大風激止列及流列洪水十五日 安永三年二月廿日有言以て大雷二十七より為り
 八分連河大霧の激止列及流列洪水十五日 安永三年二月廿日有言以て大雷二十七より為り
 大月十七日沙暴大川を以て激止列及流列洪水十五日 安永三年二月廿日有言以て大雷二十七より為り
 安永身今日演初是と大川橋と唱今奉稿と云月十二日廿九日大風激止列及流列洪水十五日
 持流諸山三家原流流初奉稿と云月十二日廿九日大風激止列及流列洪水十五日
 茶葉多の如く是の如く改格出出 安永四年二月廿日小擲門判り定出
 収加者以て是の如く改格出出 安永四年二月廿日小擲門判り定出
 候中流候内小擲門判り定出 安永四年二月廿日小擲門判り定出
 是切也時流再取 安永四年二月廿日小擲門判り定出
 中擲門判り定出 安永四年二月廿日小擲門判り定出
 是切也時流再取 安永四年二月廿日小擲門判り定出
 是切也時流再取 安永四年二月廿日小擲門判り定出

まひんと形道を以て後陸はなひてナヨロと云ふ事より魯西亜大角を敵のる云ふ事ありけり
と云ふ魯西亜人の報告によつて放ち其美を奪ひ去ぬと云ふ事或は彼地を扱のくより親族を
はつれ高橋あとの説とて以て家より罵るは時と為て伊豆佐竹の家を新よ松前の上湯差
せし其其好近國の該族海岸を渡のりて以て此日六月六日參政堀回傍海を以て敷物
とて之を船夷巡察と令せしむる自付中川花澤古志英は目付を以て令に伊豆普賢は敷物
松前(山)容村と云ふ事雄志は副ら加つていふ所の所々派流と業とせるは家母は
番具とてまゝ古志遊動く家の形再陣御殿とてまゝ是等とてまゝの中何と云ふ物
と云ふ事其まゝの事知らぬも安らぐぬ心地も亦或は船夷の辺境より南に津波の共魯
西亜人と戦を接し來り傍放と法せし或は美秋の兵船數百艘統舟に脱後口と塞し
船に乗りカカ一艘長崎より本國へ渡航すこと沖合に其母の運漕を遮つたまは松前の一丸
して後あつた其母を恐怖して病を患へし人をも奪せし或は虜と成りし云或は松前
の家老十國の某は魯西亜と亦縁の因と結ひ妻姫を以て奪て彼處より去りし事あり

て皆しむるも云はれぬる竹橋門内の古松風ありて折氷川崎村の本社造りて
あつた事小島より又板橋軍艦の古較操練死を三浦の丸起りて又水元船を白
虹目と貫く又和音南小玉皇馬て月と載て消す月十九日津川崎を以て船夷の
船に練物病群系し永代橋落て溺死す事百餘人あり是れ亦の事お経記に云ふ事
は是と説ひて劇話と云ふ事其を感して云魯西亜田舎せし漸く國を令今後代あり
て魯國が小島津に空政元年我國漂流の事を送つて船夷の地子モロとの事あり
是れ魯西亜我はよする始と云ふは彼國漂流人を送る事ありし事ありし事ありし
後とて求て不存の國と云ふ事ありし事ありし事ありし事ありし事ありし事ありし
通信を商と信ふ事ありし事ありし事ありし事ありし事ありし事ありし事ありし
と云ふ船夷の辺境を以て冠とて津一物のみ小島を根拠と知るべし此れより異秋
我辺境を侵すもの數十度ある中より安正年の冠患ありし事ありし事ありし事ありし
その事紀して志守府小島より一の文永元年之勝勝と列すまで九十三年と經る事あり

人の言ふ事も其れに似たり亦き其物に似たり...
予が余りて...
紅毛人...
三月...
四月...
五月...
六月...
七月...
八月...
九月...
十月...
十一月...
十二月...

百軒年紀あり...
石州...
聖年二月...
將城中...
東眼...
江原...
金子...
秋深...
戶發...
本丸...
今之...
大
百一

清水

大徳集出精の... 日向坊上... 寛文再建... 造更成日七月十日... 文姫... 日向坊上... 寛文再建... 造更成日七月十日... 文姫... 日向坊上... 寛文再建... 造更成日七月十日... 文姫...

四倉

三年二月十九日... 日向坊上... 寛文再建... 造更成日七月十日... 文姫... 日向坊上... 寛文再建... 造更成日七月十日... 文姫...

国鑑

日向坊上... 寛文再建... 造更成日七月十日... 文姫... 日向坊上... 寛文再建... 造更成日七月十日... 文姫...

大

百二

天保十一年三月廿二日... 大抵震日十六日... 日近年景候... 切果以改料... 二月廿八日... 物 文政三年正月十六日... 二月廿八日...

物 文政三年正月十六日... 二月廿八日... 物 文政三年正月十六日... 二月廿八日... 物 文政三年正月十六日... 二月廿八日...



